

<書評>

日本コミュニケーション学会中部支部の書評は今回で5年目を迎えた。そのような記念すべき年の書評の編集に携わることができて光栄に思う。

今回はなるべく多岐に渡る専門の方々から書評を集めたいと考えた。海外にいる研究者にも声をかけ、メールで書評を送ってもらった。その結果、英語教育、マスコミュニケーション、医療、メンタルヘルス、レトリック等々、様々な内容の本の書評を揃えることができた。個人的には、あまり最近連絡を取っていなかった方々に連絡をする良い機会をいただいたと勝手に思っている。

全ての方々の書評を読んでまず思ったのは、流石コミュニケーションを専門にしておられる方々、その本の背景を知らなくても、面白く理解できるように書いている、ということだ。つまりそれは、普段、触れてこなかった研究領域について知る最良の機会を与えてくれていることを意味する。普段、研究以外の業務に追われ、自分の研究もままならない状態で、他の分野の研究がどのようなものか知る機会はなかなか作れな

い。コミュニケーションのプロフェッショナル達が、普段触れることのできない良著を解説しているこれらの書評を読むことは、実は贅沢な時間なのではないかと感じた。

書評を読むということは、本の解説を読む、ということとイコールではないと思うし、本の解説が知りたければアマゾンの解説を読んでいればいい。ここにある書評を読むということは、コミュニケーションに関する良著を、コミュニケーションのプロフェッショナルが読み解いたことにより生ずる芳醇な知識のエッセンスを味わう作業なのだ。是非、心して味わっていただきたい。

※書評は寄稿者の名字/Last Nameを「あいいうえお順」に並べてあります。

※編集作業は、2月下旬に行いますので、それまでに、原稿をいただけたらと思います。
原稿は、今井までお送りください。
送付先：imatatsu@nanzan-u.ac.jp

目次

1. Joosten, T. (2012). *Social media for educators: Strategies and best practices*. San Francisco, CA: Jossey-Bass. 【Kaiser, Meagan (南山大学教員)】
2. 仁平典宏 [著] 『「ボランティア」の誕生と終焉—〈贈与のパラドックス〉の知識社会学』名古屋大学出版会 (2011年) 【久保田絢 (愛知淑徳大学教員)】
3. ダンカン・ワッツ [著] 『偶然の科学』 (青木創 [訳]) 早川書房 (2012年) [Duncan J. Watts (2011) *Everything Is Obvious: Once You Know the Answer: How Common Sense Fails Us*. New York: Crown Business] 【近藤恵梨奈 (愛知淑徳大学大学院 グローバルカルチャー・コミュニケーション研究科 博士課程前期 2011年度修了生)】
4. Campbell, R., Martin, C., & Fabos, B. (2015). *Media & culture: Mass communication in a digital age* (9th ed.). Boston, MA: Bedford/St. Martin's. 【花木亨 (南山大学教員)】
5. Fadiman, A. (1997). *The spirit catches you and you fall down: A Hmong child, her American doctors, and the collision of two cultures*. New York: Farrar, Straus and Giroux. 【平田亜紀 (愛知淑徳大学教員 非常勤講師)】
6. 日高勝之 [著] 『昭和ノスタルジアとは何か—記憶とラディカル・デモクラシーのメディア学—』世界思想社 (2014年) 【福本明子 (愛知淑徳大学教員)】
7. 日高勝之 [著] 『昭和ノスタルジアとは何か—記憶とラディカル・デモクラシーのメディア学—』世界思想社 (2014年) 【藤巻光浩 (静岡県立大学教員)】
8. 柿田秀樹 [著] 『倫理のパフォーマンス』彩流社 (2012年) 【藤巻光浩 (静岡県立大学教員)】
9. 東豊 [著] 『リフレーミングの秘訣：東ゼミで学ぶ家族面接のエッセンス』日本評論社 (2013年) 【南和行 (あいクリニック神田 臨床心理士)】
10. Kuwahara, Y. (2014) *The Korean Wave: Korean popular culture in global context*. New York, NY: Palgrave-Macmillan. 【Lee, Austin Ph.D. (Assistant Professor, Department of Communication | Northern Kentucky University)】

Joosten, T. (2012). Social media for educators: Strategies and best practices. San Francisco, CA: Jossey-Bass.

Social Media for Educators: Strategies and Best Practices explores the why, the how, and also the “what if” questions of using social media in the classroom. Some parts of the discussion could apply to students of any age, but the main focus feels to be on the university environment. The stated aim of Part I of the book is to develop a clear rationale for why social media would be a useful tool in the classroom. Part II looks at practical examples. Finally, Part III describes potential pitfalls that might arise from implementing social media use as part of the curriculum. The author, Tanya Joosten is the director of the University of Wisconsin-Milwaukee’s (UWM) Learning Technology Center. Her doctorate work was in communication, management and public administration and she has been exploring the use of Social Media in her teaching and research for over a decade.

While many journal articles have been written about the possibilities and practicalities of Social Media use in the classroom, at present, this is one of only a small handful of books to attempt to fully explore the topic.

Part I defines Social Media and Web 2.0 well and lays out a simple framework for educators to decide for themselves which Social Media tool to use and why. The book begins with a co-created definition of Social Media and a definition of Web 2.0, which the author differentiates from the Social Media as being the actual technological foundation for what we think of as Social Media. Following this, Joosten describes in great detail how teachers can use Social Media for networking with colleagues.

What was lacking however, was adequate depth on the stated goal of Part I; a clear rationale for social media in the classroom. Joosten lightly touches on results of Computer Mediated Communication research which show the efficiency of synchronous communication channels like online chat and the effectiveness of social media for building relationships, but does not actually delve into the topic with data or examples or push beyond this rather limited understanding of social media’s possibilities in the classroom. Social Media’s diverse collaborative possibilities aren’t really explored here.

Part II is the central focus of the book. If you use Social Media extensively, the practical examples in this section will perhaps be obvious, but it could be of great use to a highly motivated novice. There is a lot of discussion of how hashtags work and why Facebook might be a great way to connect with students, for example. Also, there is a lot of information on how to choose a Social Media platform to meet the needs of your specific class. In this section of the book Joosten also does something very valuable even for savvy Social Media users however, she contextualizes the use of Social Media from the point of view of someone with a strong background in communication. She looks at the way young people view social media and the way that online social identities, like Facebook profiles, help to develop the feeling that the other person we are communicating with is an actual human being.

Part III is very different from the other sections of this book. It looks at Social Media from the perspective of administration

and university policy making. Joosten uses this section to describe in quite a bit of detail the hidden costs in time, training, support and money which should be considered before implementing wide-scale use of social media as an educational tool. The last chapter in Part III describes how to collect and analyze data. It’s a rather general method for doing this kind of research, but again, for a novice to this process, it would be a very helpful guide.

Critically speaking, Social Media for Educators: Strategies and Best Practices could possibly have been a stronger book if the audience were more clearly defined. It feels like the book is at times too complicated for a Social Media novice, but too simple for a veteran to online society. It bounces between being a practical classroom guide for specific activities and following a more theoretical approach, making it a bit of a difficult read. That said, there is a great deal of useful information for a wide variety of people. Also as a snapshot of where we are in our thinking as a culture in regards to Social Media at this time in history, it has a lot to offer. Overall, it’s worth a read for those in higher education who are interested in using Social Media as a communication tool in the classroom.

Kaiser, Meagan (南山大学教員)

仁平典宏 [著] 『「ボランティア」の誕生と終焉—く贈与のパラドックス>の知識社会学』名古屋大学出版会 (2011年)

「ボランティア」には、「偽善」や「自己満足」という言葉が絶えずつきまとう。そして、ボランティアに参加しようとするとき、何かためらいのようなものを感じる人は多いのではないだろうか。これはなぜなのだろうか、というのが私の長年の疑問であった。この疑問に答えてくれたのが本書『「ボランティア」の誕生と終焉—く贈与のパラドックス>の知識社会学』(2011年)である。

本書のキーワードとなるく贈与のパラドックス>は、く贈与>とは意味論上、不安定で、理解されにくい行為であるという考えが前提となっている。く贈与>とく交換>は総合的に捉えられるとのデリダの議論に基づき、く贈与>はく交換>として捉えられることにより、はじめて意味上の安定性を獲得するという。く贈与>とは「絶えず反対贈与を「発見・暴露」される位置にある」(p. 13)。つまりく贈与パラドックス>とは、「他者のため」と解釈される行為が、同時に、何らかの反対贈与を伴っているのではないかと絶えず疑われる意味論形式を指す。

本書はく贈与のパラドックス>という課題の解決に向けて、「ボランティア」的なものの語りの形式が日本においていかに変容してきたかを明らかにしている。「ボランティア」の先行語である「奉仕」の語が登場する直前の明治後期から 2000 年代にかけてのボランティアの歴史の変遷を丹念に辿っているため、日本のボランティ

アの歴史的経緯を把握することができる。また、本書は「贈与のパラドックス」の意味論的分析に加え、動員モデルを用いて意味論に「内在しながら、それを変容させていく「力」」を顕在化させている。つまり、言説と国家の政策・資本などとのダイナミズムを描き出しているのである。ボランティアや援助、市民社会について研究するものにとっては、必読の書である。本書の緻密な研究は高く評価され、本書は日本社会学会第 11 回奨励賞、第 13 回損保ジャパン記念財団賞を受賞している。

ここでは紙面上、動員モデルの分析には立ち入らず、本書で述べられている「贈与のパラドックス」を脱するための解決の諸形式のうち、現代においても広く用いられている解決法を紹介し、事例等を挙げながらこの解決法について私見を述べてみたい。

まず戦前期からある解決の方法として、利他を徹底することで、あくまでも純粋な贈与であることを示す方法がある。この解決方法は現代においても見られる。例えば、2010 年に「伊達直人」と名乗る男性から児童相談所にランドセルが送られたことを皮切りに、同じように「伊達直人」と名乗り素性を隠して寄付をする行為が相次いだ「タイガーマスク現象」である。「タイガーマスク現象」は匿名により利他を強調する解決形式をユーモアを込めた形で表したものであるといえるであろう。2010 年の 12 月から約 2 週間のうちに、これらの匿名による寄付行為は全国に広がり、1,000 件を超える寄付で総額は 3000 万円以上となり、首相や皇太子をはじめ多くの人から称賛されたことから、匿名によって利他性を強調する贈与のあり方は日本において高く評価される形式だということがわかる。この現象を「日本の照れの文化によるもの」（2011 年 1 月 11 日 日本経済新聞）と捉える見方があるが、この「照れの文化」とは、名声を得たいがために寄付しているのではないかといった反対贈与を疑うシニカルなまなざしが強い文化であるとも言えるのではないだろうか。本書では「贈与のパラドックス」の分析は日本に語りに限られており、他の国の「贈与」をめぐる語りについては触れられていないが、反対贈与を疑うまなざしの強さは文化によって差があるように思う。

もう 1 つの古くからの解決の形式として、宗教による解決法がある。宗教は「贈与」に了解可能な意味を与えることで、「贈与のパラドックス」を回避することを可能にする。先日「朝日新聞グローブ」（2015 年 1 月 4 日発行）で寄付についての特集記事が組まれていたが、日本は寄付の規模が米国の 30 分の 1 程度、寄付をした経験がある人の割合は 24% で 62 位と寄付に関心が低い。一方で寄付した経験のある人の割合が高いのは、仏教が盛んなミャンマー（1 位）であり、タイ（3 位）である。日本に寄付文化が根付かない要因については様々な議論があり、先に述べた反対贈与を疑うシニカルなまなざしが強いという要因も当然考えられる。それに加えて見逃してはならないのは、日本人は特定の宗教を信仰してい

る割合が低いという側面である。宗教によって「贈与のパラドックス」が解決できないのである。宗教を別の報酬を受け取るための隠れ蓑にしているのではないかといった疑惑を排除しきれないため、宗教も「贈与のパラドックス」を完全に回避することはできないと本書では述べているが、やはり宗教による「贈与」の意味づけは寄付を含むボランティア行為を支えるもっとも強力な論理の 1 つであり続けているのではないだろうか。

「贈与のパラドックス」を回避するための語りの形式として、1980 年代以降盛んになったのが自己に対する効用を強調する自己効用的ボランティア論がある。楽しさや成長など自己に対する効用を強調することで、「交換」に「近似」させてボランティア行為を他人から見て理解可能なものにさせるというものである。しかし、自己効用論的なボランティアは、ボランティアをする人自身の人間形成が目的となり、対象者を自己啓発の手段として利用しているという批判を浴びた。著者は自己効用論による「贈与のパラドックス」の解決法は、「与え手」に照準を合わせたものであると指摘する。一方、受け手から見れば、相手からの「贈与」は、人格的に相手に優位性を与え、自らを劣位に置くことを意味する。この「贈与」によって、受け手の自尊心を傷つけてしまうというのである。

このような自己効用論に対する批判や人的資源の確保の問題からボランティアに報酬を出すといったシステムが出現する。これらの動きを著者は「交換の実体化／制度化」と呼ぶ。「交換」の実体化（例えばサービスの有料化）は、相手と対等の関係に立つことができるという効用をもたらす。

「交換」の制度化／実体化は政府、市場、市民社会の境界を曖昧にし、ボランティアはもはやボランティアではなくなっていく。「ボランティア」という言表は「NPO」に取って代わられるようになる。これを著者は「ボランティアの終焉」と呼ぶ。この現象は日本のみならず、例えば、BOP ビジネスやフェアトレードといった形で世界中で起こっている。開発にビジネスの視点を取り入れることの重要性が認識され、さまざまな実践が始まっている。施しではなく融資を、援助ではなくビジネスをという議論が力を持つ中で、「貧困削減に善意はいらない？」という議論すら可能なのではないかという問題提起が 2014 年に行われた国際開発学会全国大会のシンポジウムで社会学者の佐藤寛によってなされている。

「交換」を志向することにより「贈与のパラドックス」が解決される中で、とても興味深いのは、著者が本書の最後で「贈与のパラドックス」を引き受ける立場があってもよいのではないかと述べていることである。「贈与」に対するシニカルな眼差しは、「贈与」の意味論自体が「召喚」するものなので避けることはできない。そういうパラドックスの指摘と向き合いながら、それでも他者のために何かをするという「贈与」の行為を断念しない立場である。「偽善」に賭ける。その何がいけな

いのか。」と問い続けることで、討議を開き、他者への問いを分有させていく機能が〈贈与〉の意味論には残されている」と主張する (p. 438)。シニカルな視線にさらされながらも敢えて〈贈与〉という不安定な意味論を手放さないという論理は、現在の援助の潮流とは異なる〈贈与〉の意味論の新たな可能性を示している。

久保田絢 (愛知淑徳大学教員)

ダンカン・ワッツ [著] 『偶然の科学』(青木創 [訳]) 早川書房 (2012 年) [Duncan J. Watts (2011) *Everything Is Obvious: Once You Know the Answer: How Common Sense Fails Us*. New York: Crown Business]

よくよく考えれば、これは当たり前のことではないか——様々な情報に接していて、誰もがそんな感想を一度は抱いたことがあるだろう。特に、今や玉石混淆の情報プールと呼べるウェブ上では、研究結果や報告書、それらの報道など大小問わず情報が容易に入手できるため、その頻度も高くなるだろう。この各個人が何気なく持っている「当たり前」や「常識」の認識こそ、思考上に開けられた厄介な落とし穴である。本書は「Common Sense/常識」・「Uncommon Sense/反常識」と題された二部構成でその主題を展開している。

まず第一部では、常識を取り巻いている不明瞭な状況から始まり、常識に基づいた推論の誤りの考察、常識をより形作っている人々による行動の影響、そして過去の歴史と未来予測における誤解まで、六章にわたりあらゆる理論紹介と社会学実験結果を交えて議論している。

本書でいう常識とは非常に実践的な知性であり、自然科学における理論的知識と違い、世界の具体的状況にそのまま対処できると説明している。また、常識はほぼ同じ社会・文化内で経験を経た者同士でしか成立しない。一方では納得・もう一方では不可解という例が示すように、時代や文化で大きく変化し、個人の信念に至っては矛盾ばかり生じる面もある。常識は日常生活上での問題解決に役立っているが、多くの人々の行動予測が必要になる政治、経済、法律に関する政策立案時においては、この土台の不確かさが裏目に出る。実際、直観に頼った事態予測は外れ、常識に即した数々の計画や解決策が失敗という結果に終わっている。

その上、ある文化作品や社会現象が世界的な知名度を獲得したり、唐突に人気急騰したりする理由の説明も常識に基づいていることが多い。〈モナ・リザ〉の絵画や「ハリーポッター」シリーズなどを例に挙げながら、対象そのものに注目しそれ自体固有の特質こそ成功の根拠とする説明は、一見正しように聞こえるがいわゆる循環論法であり、成功または失敗という現象を完全に説明できていない。更に、実際の社会的ネットワークの仕組みは、偶然性を伴った複雑なものであると実験が示して

いるのにも関わらず、人脈の多い有名人や影響力の強い一部の「特別な人々」が、そうでない一般の人々へ流行を促す多大な役割を果たしたという考えが好まれやすい傾向にも、循環論法が潜んでいる。

これらの後付けとも呼べる説明に共通する、未来で起こった知識を織り交ぜながら現在の出来事を記述する形式は物語文と呼ばれるが、歴史説明もまた史実とは違う視点で書かれた物語文であることも意味している。その中でも単純明快で出来の良いたものが魅力的に映り、人々に正しいと判断されてしまうため、目的も状況も変わっている未来の予測に何の疑いもなく適用されるのである。勿論、未来予測を全く立てられないことではないが、問題は過去の法則に当てはまる信頼性のある予測と、そうでないものの区別ができていないことである。

次に第二部では、常識の落とし穴に足を取られないために、予測に対する最も適切な心構えと社会科学が担う役割を、四章にわたって述べている。

いかに戦略が練られた計画でもその成功結果を予測するには限界があり、ソニーのベータマックスや MD (ミニ・ディスク) の失敗などをビジネス面の例として挙げている。未来の予測よりも現在への対応に重きを置くという、測定・対応の戦略に最も長けているのはオンラインの世界であり、既に現実世界のあらゆる状態の測定能力はウェブによって格段に向上した。とはいえ、これで予測に必要な情報が得られるわけではなく、計画者側が常識に基づく直観に頼っていることを自覚し、計画への自惚れを伴った従来の考えを改める必要がある。

また、常識に基づいた評価のやり方は結果のみによって大きく左右される。ある特徴の評価が関連のない他の評価にまで広がる「ハロー (後光) 効果」や、豊かな者はさらに豊かに、貧しい者は更に貧しくなる傾向を表した「マタイ効果」が世界の大部分を覆っているのである。その中で才能と成功と運、そして個人の貢献と集団の実績を切り離して論じることが社会正義の論争点のひとつになり、政治哲学者たちは熟慮しながら様々な意見を発してきたが、議論だけで終わらせないことも重要であり、社会科学がその一面を提供できるのかと問う。

人間に関する総合理論を扱うはずであろう社会学は、数学、天文学や各自然科学と比べ研究の蓄積時間が少ない上、各社会理論家が持つ常識の齟齬が関係しているのか、未だ全体が納得できる理論を見出していない。ウェブやインターネットといった発達した通信技術によって、人々はようやく複雑で扱いにくい社会ネットワークの一端を追跡でき始めている。それが社会科学の純然たる普遍法則の発見に貢献するとは限らないであろうが、諸科学が成果の少ない研究に膨大な資源をつぎ込むのをやめないように、社会科学もあらゆる手段を尽くして追究する必要があると結論づけている。

本書は一般読者が対象であるのか、身近で馴染みやすい例と社会心理学や社会学実験結果の概要が適度に挿入されている。実験における記号や公式もほとんど出てこ

ないので読むことはさほど難解ではない。ただ、扱っている話題が多少広範囲になっており、専門家には結論の見にくいかつ新鮮味に欠ける「自明の」内容かもしれない。しかし、本書でネットワーク科学や社会（科）学の理論や知識と初めて出会った読者にとっては、その分野への好奇心を刺激させるには十分の魅力を持っている。

著者のワッツはかつて物理学を専攻しており、社会心理学者のスタンレー・ミルグラムの実験で有名なスモールワールド現象を解明した「現代ネットワーク科学の先駆者」と称されている。本書内にワッツ自身の実験結果を含めたオンライン関連の話題が豊富であるのは、彼が2012年までヤフー・リサーチ、現在はマイクロソフト・リサーチに所属していることに由来する。故に原注や参考文献も、ウェブやインターネットといったオンラインコミュニケーションを研究するには大きな手助けとなるであろう。

取りわけ筆者が新鮮に感じたのは、物理学視点から社会学を論じているくだりである。確実な精度と再現可能な結果を求められる自然科学畑から、一回しか試行できず再現不可能な現実世界を扱う人文科学畑に移ったワッツの、その狭間における戸惑いや苦悩に近いものも文章から垣間見える。確かに明快な法則のある分野に比べれば、人間社会を扱う分野はどうしても複雑で曖昧になる部分が大半であり、時折展望さえ暗くなることもある。それでも、実験を繰り返した結果から自然科学の今日があるように、社会（科）学も希望を持って進むことが大切なのだろう。研究には完成も終わりもないことを、本書で改めて再確認した。

近藤恵梨奈

(愛知淑徳大学大学院 グローバルカルチャー・コミュニケーション研究科 博士課程前期2011年度修了生)

Campbell, R., Martin, C., & Fabos, B. (2015). Media & culture: Mass communication in a digital age (9th ed.). Boston, MA: Bedford/St. Martin's.

在外研究でアメリカの大学に滞在していたとき、コミュニケーション学科の授業でどのような教科書が使われているのかが気になり、キャンパスの書店に設置された教科書コーナーに足を運んでみた。そこで売られていた本の一つが Richard Campbell, Christopher R. Martin, & Bettina Fabos 著『Media & Culture: Mass Communication in a Digital Age (9th ed.)』(2015年)だった。マスコミュニケーションの諸側面について、アメリカにおける事例を中心に具体的かつ包括的に解説した入門書である。簡潔な文章を用いたり、写真や図表を多く掲載したりするなど、現代の大学生たちの興味を惹きつけるように工夫されている。商業的にも成功を収めているようで、毎年のように新しい版が刊行されている。今回は第9版について書くが、こうしている間にも第10版が刊行されることだろう。

本書はアメリカにおける各種メディアとそれらをめぐりいくつかの現代的課題について、一つのわかりやすい見取り図を提供している。第一章でマスコミュニケーションの一般的特徴を確認した後、第二章以降で各種メディアを一つずつ取り上げながら、その歴史、特徴、利点、問題点などを記述していく。そこでは、インターネット、ゲーム、音楽、ラジオ、テレビ、映画、新聞、雑誌、本、広告、広報など、代表的なメディアがほとんどすべて取り上げられている。最後のいくつかの章では、メディアと世界経済、ジャーナリズムと民主主義、メディア研究の手法、表現の自由などの論点について、有益な議論が展開されている。

すべての章を貫く本書の特徴として、歴史的な視点を大事にしていることと、各種メディアと民主主義との関わりを強調していることが挙げられる。ラジオであれ、テレビであれ、インターネットであれ、それぞれのメディアを扱った章の冒頭では、これらのメディアが誕生し、発達し、普及していった様子が記述されている。また、それぞれのメディアの間の歴史的関係についても、折に触れて言及されている。たとえば、テレビの出現がラジオに影響を与え、インターネットの出現がテレビとラジオに影響を与えたというような歴史的相互関係について触れられている。このような歴史的視点は、本書にある種の物語性を与えている。読者は物語を読むように、それぞれのメディアについての理解を深めることができる。

メディアと民主主義との関わりは、本書の重要な主題である。本書の読者は、活版印刷技術が活字メディアをどのように発展させたのか、それによって人々の識字率がどのように上昇したのか、そしてそれが民主主義社会の実現にどのように貢献したのかという経緯について、想像する機会を得る。また、文字を読む人々と文字を読まない人々の双方を魅了するラジオやテレビや映画、高度な双方向性と表現の自由を実現するインターネットが、民主主義社会において果たす役割について考える機会を得る。

全体から受ける印象として、本書は分析的あるいは触発的というよりも、記述的である。しかし、それは本書が退屈だということを意味しない。本書の記述には、多くの読者が知っているようで知らないであろう興味深い情報が含まれている。そして、それらの情報は読者を惹きつける歴史的物語の形で提供されている。本書を通読することで、読者はアメリカのメディアと文化をめぐる現実認識を新たにすることができるだろう。そして、その新たな現実認識は、アメリカのメディアと文化について、またマスコミュニケーション全般についての独自の考察へと読者を導いていこう。

花木亨 (南山大学教員)

Fadiman, A. (1997). The spirit catches you and you fall down: A Hmong child, her American doctors, and the collision of two cultures. New York: Farrar, Straus and Giroux.

ナラティブ研究の難しさと美しさが凝縮された書籍である。質的研究の在りかたや研究者の資質についての議論はたびたび持ち上がる*。もちろんその点についても考えさせられるのだが、それ以上に読者には届けられる言葉を受け取る〈感性〉が求められるのだろうかと考えさせられるのだ。本来、研究の報告はそういった側面において読者を選んではならない。しかし少なくとも私が初めて本書を手にしたとき、その主観に偏った記述にとても戸惑ったのを覚えている。10年の時を経て改めて読むと、この事例が当事者の言葉を借りることでしか伝えられない内容なのだと気づかされる。10年前の自分にはない〈なにか〉が今の自分にはあるのだろう。

さて、肝心の内容であるが、米国カリフォルニア州の病院を舞台に、医療スタッフとラオス出身のモン族(Hmong)の難民である Lee 一家の間で起こった異文化摩擦とその悲劇的結末(この書評を書くにあたってそれが〈結末〉ではないことに気づかされるのだが)が緻密に計算された物語のように綴られている。

Lee 家の 14 番目の赤ん坊である Lia は出生当初こそ健康であったものの 3 ヶ月のときから癲癇(てんかん)の発作を繰り返し最後には植物人間状態になる厳密には発作がこの結末を引き起こしたのではないことが後日明らかになる)。このとき Lia Lee はたった 4 才だった。

アメリカに渡ったことで、1980 年代当時としては高水準の医療を受けることができた Lia Lee であるが、両親は英語が理解できずさりとてモン族の言葉の読み書きもできないことから通訳を介しても医師の献身的な姿は誤解され、投薬の指示も守られることは少なかった。また彼らは、癲癇を高次の存在から選ばれた者の証であるというモン族の伝統に倣い娘が遇されるべきであると考えていたため、発作の起こったときは高次からの使いとして、それ以外のときは大切な娘として十分な食事を与え、活発に動き回るわが子を見守り育てていた。しかしそれは、アメリカ人医師たちの目には発作を繰り返し多動性のある幼児への適切な対応を指導しているにも関わらずそれを受け入れないばかりか、わが子の健康を積極的に損なわせばかりに肥満を助長させる食育をする姿として映る。互いに不信感の募るなかで、それでも病を治す祈禱師(shaman)のいないアメリカにおいて両親が頼れる先は病院しかなく、発作があるたびに救急室(ER)へと足を運ぶのだ。

ありとあらゆる場面で生じた齟齬を当事者の証言と医療記録をもとに洗い出し、その背景にあった両者の思い込みを丁寧に言葉にした Fadiman の根気のいる仕事ぶりは見事としかいいようがない。また Fadiman はその齟齬(異文化衝突)の一部を担っていると考えられるモン族

の価値観について大胆に章を割いて説明している点が読者への配慮といえよう。一方で、アメリカ人がその齟齬の一旦を担った自文化と自分の中にある思い込みを理解するための手助けがやや欠如していることは否めない。肥満を否定する文化。医師に〈従う(comply)〉ことを要求する文化。症状を〈抑え込む(control)〉ことを善とする文化。これらは指摘してもらわなければ気づけないのではないだろうか。二者間で起こる問題は一方だけを分析しても問題の一側面しか見えてこない。とくにもう一方が読者にとってあまりに馴染み過ぎているものであればなおさらである。その一方で、医療スタッフですらもどかしいと感じていた病院の財政状況や州法の制約などによって起こった問題は、それほどまでに顕在化している時点で〈文化〉という言葉で片付けしきってよいのだろうか、その乱暴さも気にかかった。

今読み返しても、アメリカの社会構造に対する Fadiman の補足的説明の少なさと、代わりとばかりにアメリカ人好みの大きな〈公〉対小さな〈私〉に類似する分かりやすい対立構造から抜け出し切れていない話の進め方——Fadiman 自身はそれをしないように心掛けたと主張するが——が残念だ。しかし同時に今回は、客観性を持ち出すと当事者の言葉の重みが失われてしまう危険性のある繊細な事例であるのかもしれないことに思い当たった。それは読者が擬似的な当事者性を味わい、この事例から学び取る機会そのものを奪うことに等しい。ナラティブ研究には読み返すたびに発見がある。

本稿を書くにあたって Lee 家について調べた。なんと Lia Lee は 2012 年に 30 歳で亡くなっていた。これにはひどく驚いた。それは長く生きたことに驚いたのか、死んだことに驚いたのか自分でもよく分からない。数年前に父親を亡くし、アメリカ社会で身を立てた姉妹が主となって介護をしていたことが新聞記事として載っていた。短いインタビュー記事からは、その姉妹の葛藤が伺えた。物語の読者の私には 4 才の植物人間になった時点で終結した Lia Lee の物語であるが、研究者の末端に名を連ねる気があるのであれば、そうではあってはならないという戒めに感じられた。フィールドワークに協力してくれた人たちの人生は続く。そんな当たり前のことに気づかされるまでとても時間がかかった。

あらためて本書を手にとろうと思ったきっかけは今年の勉強会にある。よい本との出会いとそれを語る場を与えてくれた中部支部に謝意を表したい。

*Fadiman は自身を研究者と称してはいない。しかし Fadiman のこの仕事は誰の目からみても研究者のそれであり、p. 262 では Fadiman 自身が研究者のようにこの話を case と呼びさらに narrative であると表現している。また、本書は医療人類学研究(medical anthropology)の代表作としてあげられることもしばしばある。

平田亜紀(愛知淑徳大学 非常勤講師)

日高勝之〔著〕『昭和ノスタルジアとは何か～記憶とラディカル・デモクラシーのメディア学～』世界思想社（2014年）

本書は、『昭和ノスタルジア』を描いているとされる作品群が、単純に昔はよかったと懐古しているだけなのだろうか、という疑問を、映画作品「Always 三丁目の夕日」「プロジェクト X」「フラガール」「20世紀少年」「クレヨンしんちゃん 嵐を呼ぶ モーレツ！オトナ帝国の逆襲」の分析を踏まえ、答えを出している。これらの作品の選択も、高度経済成長、東京タワー、炭鉱の閉鎖、大阪万博と、昭和の象徴的な出来事を網羅しつつも、製作者らの経歴やそれぞれの抱えている問題意識がどのように作品の中で反映されているのか詳述されている。また、関連事項として、歴史学、ナラティブ、記憶研究、英国のサッチャーの時代の集団の記憶と政治をめぐるメディア上の意味の交渉を踏まえ、ラクラウとムフ（1985）の言説理論を用いて、上記作品を分析している。これらの作品が、戦後の日本社会の政治経済をめぐる批評として、どのように表象やイメージを「節合」させ、社会や行動の規範に対する「敵対性」を作り上げ、製作者らにより意味が織り込まれているのか、即ち、自身の価値観をもとに社会への批評も含めて織り込んでいるのか、を分析して結論を出している。

500頁越えの分厚い本書を読んで、本書の貢献として真っ先に浮かんだことが4点ある。1点目は、記憶研究のとりかかりとして分り易くまとめられていることである。私自身が博士論文を書く前に、読みたかったなどと思った。記憶研究が歴史やナラティブとどのように関連するのか全体像が提示され、この分野に関心のある人がまとめて全体を知りたいときに、それらを取り扱っている第1章「記憶とナラティブ」が非常に参考になると思われる。コミュニケーション研究で物語や主観性について関心のある人にもお勧めの章である。

2点目は、論文の見本のようなご著書であることだ。対象とする「昭和」をどのあたりにするのかなど、必要な定義が冒頭で提示されている。解釈学的な研究において客観性を担保するためにどのような理論や分析の枠組みを用いるのか、なぜその作品を選んだのかなどの理由の提示も明確である。解釈の確認情報（トライアングレーション）として、当時の報道や番組や映画製作者の背景、関連事項との照らし合わせを提示されており、解釈に説得力があった。特に理論関連の引用では、難しい箇所は、必ずご自身の言葉で抜群のわかりやすさで表現し直されていて、解釈と言語表現の両方で非常に参考になった。番組制作側やメディア作品で論文を書きたい研究者と院生（院生には使用されている理論は難しいであろうけれど）、方法論や書き方の参考としてもお勧めしたい1冊である。また、著者の業界におられたからこそその知識が豊富であったので、職業の変遷がもたらす、研

究の幅と奥行き豊かさについても感じられるご著書でもある。

3点目は、ナラティブ、ライフストーリーの実践作であること。書き手の問題意識や立ち位置がどのように作品に影響があるのか、本書の内容とともに、著者の経歴も踏まえて興味深く読めた。著者が大学で政治経済学部で学ばれ、NHKの報道局ディレクターを経て、イギリスの院でメディア学にて最終学位を取得され、立命館大学で教育・研究に携わっておられる経歴が余すところなく反映されていると思った。年齢を考えると、昭和30から40年代の記憶について語るにはまだお若いのではと思っていたが、「あとがき」で、幼少のころ大阪に住まれており、（今年はサバティカル中ですが）現在関西圏でお勤めで万博記念公園の横を「太陽の塔」を見ながらモノレールで通勤されていると書いてあり、納得した。上野千鶴子の「そう語るお前は何者なのかという問い」を「あとがき」で引用されており、その点を常に意識されながら、且つ、ご自身の解釈に偏りすぎないように当時の報道を記載され、メディア業界におられたからこそご存知の広い情報や事例をあげられ、経歴や問題意識と立ち位置の重要性が伝わってきた。本書は、日高勝之という人間が、「昭和ノスタルジアとは何か」という課題に、自身の経験と知識を動員して分析するところなるのだよという、社会と政治とメディアをめぐるある一つのメタナラティブの提示だと読後に感じた。

4点目は、方法論としての新規性である。本書では、ラクラウとムフの言説理論をメディア研究に応用している点が新しい。言説を分析する理論としてコミュニケーション研究によく利用されるのは、ディスコース分析（DA）やクリティカルディスコース分析（CDA）があるが、それらでは物足りず、メディア研究や政治分野で特に活用できるようラクラウとムフの理論を援用している。その際には、著者は理論の問題点を指摘しつつも、政治のような対抗勢力が非常に重要になってくるような分野で「敵対性」という観点を持ち込み、事象を分析し、別の解釈の可能性を開き、議論を活性化させ、社会変革の可能性を見出す重要性を示唆している。このような観点到非常に興味を覚えた。ラクラウとムフの理論が応用の効く範囲や分野の限定もあるであろうが、それは今後研究がすすむにつれ議論され深まる点であろう。CDAだけでない分析の枠組みがあることの提示は、非常に貴重な貢献である。

字数の関係で4点にしぼったが、本書の分析を読み改めて映画を見ると、映画作品がまた違って見え、理解や解釈に奥行きが広がる面白さを感じた。

と同時に、疑問として感じた点もいくつかあった。まず1つ目は、オーディエンス（読み手・聴衆・視聴者）の多様性についてどのようにとらえるべきなのかという点である。このインターネットやSNSが発展しているこの時代に、すべての作品のオーディエンスのコメントを分析することは物理的に不可能であること（p.105）、

取りあげたコメントも千差万別であり類型的にとらえることの困難さ (p. 382) についても言及されているが、その一方で、序章では「昭和ノスタルジア」のブーム化について述べられおり、取り上げた作品それぞれの高い評判や売上についても分析の章でそれぞれ記載されている。多様な読み手があるとはいえ、需要の高さが受容の一律性を示唆しているのではないかと感じた。また、ジェンダーの観点からの分析があっても多様で良かったのではないかと感じている。「クレヨンしんちゃん」の映画を見て盛り上がったコメントも (pp. 374-377)、「盛り上がらない世代」のコメントも紹介されているが (pp. 379-381)、男性からと思われるコメントが多く女性である私が映画を見ても感動的ではあるがピンとこない感が否めないのも事実であった。その映画では、ケンの挑発的な発言にヒロシが対抗しての発言ではあったものの、とはいえ、無難に結婚し子供もいて、それが幸せであるというイデオロギーをあげすけに発言するシーンに、見ていて私は苦しくなりました。本書では、製作者の持ち込む価値観が作品の方向性に影響を強く与えることも述べられており、であるならば、オーディエンスにも多様な読みと価値の持ち込みがあるはずで、それらの扱いが希薄な印象を受けた。本書が作品分析のみであれば、納得がいくのだが、スチュアート・ホルの「能動的オーディエンス論」についてのコメントがあり、能動的な解釈が期待されたほどオーディエンスに見られなかった点も言及されている。また、視聴者のコメントも取り上げられていたので、全体としてのオーディエンスの取り扱いの一貫性について、考える点があった。

2つ目に、アイデンティティの複数性やその妥当性についての捉え方にも疑問を持った。ジェンダーの観点やアイデンティティの複数性については「フラガール」についての分析の章で止まって考えた個所があった。制作者の解釈、意図や価値観が持ち込まれるのが、歴史であり、ナラティブであり芸術作品なのであるとすれば、第6章では戦後のエネルギー改革で炭鉱閉鎖は大きな社会問題であったが、その深刻さで描かれていないこと、フェミニズムと在日の作り手の視点に回収されてしまった旨の指摘があり、それらの記述やそのトーンは本書の趣旨に沿っているのかなとふと立ち止まって考えざるを得なかった。「エピローグ」にあるようにアイデンティティの複数性を奨励し、そして意味介入のために言説活動の活性化を促す・目指すのであれば、第6章の記述は、全体の中での位置づけとして矛盾に読めてしまう気がした。回収されてしまってもよいのではないかと、すべての作品がいわゆる「正史」を描く必要はないのではないかと、むしろ視点として無視し続けられた人々の解釈や視点を取り込むことにより、代替的な解釈や視点を得られるのではないかと私自身は考えた。

3つ目は、メディア作品のナラティブの妥当性の判断基準についてである。本書では何を「良い作品」と定義されているのか。興行成績が良いものが良いメディア作

品です、と商業的には言えるのだろうが、恐らく、本書のテーマではそうではないと推察する。歴史や記憶がナラティブであるのであれば、語り手の解釈や価値観が入り込む「恣意性」が前提とされている。ただ、どの恣意性までなら許容がされるのだろうか。その許容の線引きというか基準として、本書では何をを用いられていたのだろうか。Walter Fisher (1985, 1987) はナラティブのパラダイムでは、ナラティブの妥当性を、物語の一貫性である *narrative probability* と聞き手の経験に沿って響くかどうかの *narrative fidelity* が必要であるとしている。この2つの基準では差別的な集団の物語を排除するのに不十分であるという指摘もある。ヒトラー礼賛が、ネオナチの集団に響くとしても、それを是にはできないが、Fisher の基準ではネオナチにとっては是となってしまうことを排除できない。本書でのメディア作品の妥当性、即ち本書に照らし合わせると、「昔はよかった」的な「昭和ノスタルジア」に対してどのような代替的な解釈を提示できれば、本書の観点から妥当だと判断されるのだろうか。148 頁に「『反戦』を通して、戦争の矛盾や問題点が暴かれるのではなく、むしろ戦争の矛盾が縫合されることさえある」とあるように、そのような矛盾を覆い隠さず暴く作品が妥当となりえるのだろうか。でもこの観点からであれば、「戦争は非である」ということは許してはならないという判断基準があり、Fisher の基準よりは踏み込んだものとなっている。昭和を振り返る時に、許してはならないものについて、あるいは、達成すべき政治批評のレベルについて基準があるのであれば、聞いてみたかった。

以上3点の疑問点はあるものの、読後感として、明るく希望を持った気持ちになった。CAJ 中部のセッションで著者にはどうしてそう思えるのか疑問に思われたようであったが、生きている時代や自身の体験や価値観の制約がありつつも、自身のこだわりと背景を表現し、社会の矛盾や問題点に疑問を呈し続ける営みがメディアの作品の中に多くあることを改めて知ることができ、元気がでた。見る側も、エンターテインメントとして映画作品を楽しむと同時に、製作者側からこめられたメッセージを読み解き、自分なりにより良い社会に向け行動を起こすことができればと思う。

福本明子 (愛知淑徳大学教員)

日高勝之〔著〕『昭和ノスタルジアとは何か～記憶とラディカル・デモクラシーのメディア学～』世界思想社（2014年）

タイトルで提示される問い、「昭和ノスタルジアとは何か」に対する答えは、一般的に想像されるような、「古き良き時代へのストレートな憧憬」にはない。この意味で、それを期待して本書を読もうとすると、裏切られる。しかし、それは心地のよい裏切りでもあり、新しく刺激的な知見を与えてくれることの証でもある。

「昭和ノスタルジア」とは、記憶形成に固有な、憧憬を裏切る現実であるとか、それに伴う複数性や政治性を縫合しようとする集会的な執着である。つまり、そういうものとしての昭和ノスタルジア自体を想定する私たちが、そのノスタルジア形成に共犯的関係にあることを、本書は教えてくれる。著者は、この執着を豊富な事例研究を通して暴いており、「昭和ノスタルジア」が「主に昭和30年代、40年代を中心にした近過去への複合的なクリティカルな執着による敵対的な記憶の磁場」であることを提示している（449）。そして、「昭和ノスタルジア」という言説集合体は磁場を生み出すために、他のアジェンダや物語・言説の断片と結びつき・再接合される可能性があることを、本書は示唆し期待している。この意味で、本書は、単なるイデオロギー批評にとどまらない批評の可能性を模索し、その言説集合体が、「いま、ここ」から次に向かってさらに展開する可能性をも示している。この点が、「昭和ノスタルジア」を単に静的現象として意味付けようとする、他の評論や批評とは大きく異なる部分であり、メディア研究・記憶研究への一番大きな貢献であろう。

このような成果は、「昭和ノスタルジア」を批評の対象として設定する手法によって生まれていると感じる。本書は「昭和ノスタルジア」を、一枚岩的に断絶したエポック（時代）として単純に捉えることなく、つまり通常「戦後」としてくられる1945年8月以後から綿々と続くかのごとく認識されてきた時間軸の中に吸収させるのではなく、それ自体が発揮する作用により生まれる「戦後」というエポック自体を相対化させ、その中から「昭和ノスタルジア」を抽出し、記述している。そして、「戦後」と「昭和」を冬季号で結ぼうとする作用を、読者にみせてくれるのだ。つまり、単に「戦前」と「戦後」を、単に「思い出したくない時代」と「懐かしむ時代」という二項対立的に読み解く作業自体に対してはきっぱりと異議申し立てをしているのである（126-138、431-433）。その結果、そのヘゲモニー作用を適切に記述することが可能になっている。本書は、「昭和ノスタルジア」を「戦後」としてくくることで可能になる忘却のメカニズムを暴く点で、記憶研究として、大きな学術的意義があることは間違いない。

次に、教育上の意義を二点ほど挙げてみたい。第一に、本書は、ラクラウ&ムフによる「敵対性」概念を、テク

スト批評に応用し、その手続き・ガイドラインを分かりやすく読者に提示している。恣意的に応用されがちな、この概念を使いやすく見せている点が評価できるポイントであろう。日本の近過去についての批評や論考が一貫した手続き・ガイドラインの適用によって可能になるならば、本書を通じて多くの人々に批評実践を教えることができるだろう。この意味で、少々厚い本ではあるが、教科書や指定参考図書として使用することも可能であろう。テキストの中で、またテキストと現実との間にある齟齬の中で、また製作者のポジショナリティの差異の間で、それぞれ顕在化する敵対性概念は、ナラティブ批評の手法として重宝すること間違いはない。また、敵対性概念は、レトリック批評におけるケネス・パークの批評方法との間で親和性が高く（否定性の原理）、すぐにでも参照すべき文献としてリストに加えることも可能であろう。

第二に、本書は、「昭和ノスタルジア」という言説集合体を構成する大衆文化を担ったフィルム、ドラマ、それらを論じた評論記事など、相当の数を対象として網羅しているため、極めて精度の高い批評となっている。このように集合体として構成される「昭和ノスタルジア」研究の目録的利用も可能になることを考えれば、教育にとどまることのない、今後の近過去の記憶の分析・批評理論にとっても、参照されるべき研究として重要な位置付けを獲得していくことになるであろう。

以上の理由により、本書は、近過去の記憶研究として突出した意義を持っており、多くの知見を、メディア研究のみならず、レトリック・コミュニケーション研究にもたらすことになるだろう。

藤巻光浩（静岡県立大学教員）

柿田秀樹〔著〕『倫理のパフォーマンス』彩流社（2012年）

本書は、古典期ギリシア、イソクラテスのピロソピアを、「レトリック」という学の視点から日本語で紹介した、ほぼ初の研究書である。廣川氏による、『イソクラテスの修辞学校』もあるが、それとは根本的に異なる点が本書にはある。本書は、古典としてイソクラテスを読むのではなく、現代に生きる「イソクラテス」を読む行為を遂行しているため、イソクラテスを、これまで哲学に領有させるかたちでしか提示できていなかった先行研究に、大きな風穴を開けたのではないかと思う。そして、この作業が成功しているのか否かは、読者による「読み」にも委ねられている、と言っても良い。従来の文献・系譜学的見地から本書を読み解くならば、イソクラテスは辺境に置かれてしまう可能性もある。一方、本書は、イソクラテスを哲学の辺境に置かないための「倫理」を提示するため、期待されるような読みの実践を遂行することができるのか、またはできないのかという判

断の契機 (krisis) を読者に突き付けている。この意味で、本書では、「イソクラテス」に、読者への働きかけ、つまりパフォーマンスを演じさせようとしている、とも言える。

また、そのパフォーマンスが、市民の特質 (市民性)、つまり徳の涵養と深く関わることを本書は提示しており、現代における市民性をいかに教育の対象とすることができるのかを、ほのめかしている点も野心的である (レトリックの目指すものが、市民教育にあるとするならば、市民的徳とは教授可能なものか否かという古典的争点でもあるが)。政治的市民が、いかなる条件の下に可能になるのであろうか、という問いを、イソクラテス的哲学 (つまりレトリック) が求める倫理の涵養に求めているのである。この意味で、市民性の教育、つまり徳の涵養を、イソクラテスに求め、そこにおけるレトリックの可能性を開こうとしている。

この文脈で考えれば、市民性の教育が、どのように具体的に現在において汎用性を持ち得るのであるか。そして、どのような教育が具体的に求められているのだろうか。現代的文脈でイソクラテスを位置付ける時には、著者はどのような議論の展開をみせるのか強い興味を覚えた。特に、大学教育が、企業のニーズに応えることを前提としはじめた、この時代において、イソクラテスはどのような批評的契機をもたらすのか、著者による今後のイソクラテス的発言に注目してみたい。

また、本書では、日本語の訳語に関して、いくつかの重要な示唆があったように思う。通常 (CAJ も含め日本では) カタカナで表記される「レトリック」であるが、まず「哲学」という漢字を使用し、そこに読み仮名で「レトリック」とふる。これは、イソクラテスに起源を求める、この学のアイデンティティとも関わる重要な訳出の作業であろう。そして、明治期以後にこの国に導入された翻訳語 (「雄弁」、「修辞」など) を介して、この学は常に辺境に置かれてきたことを考えれば、これらの翻訳語では、自己決定権を行使できないままなのかもしれない。この意味で、この学に関わる研究者が、この「学」のどのような訳出を望むのかを議論しなくてはならない—こんなことを教えてくれたと感じる。この意味で、「哲学」に「レトリック」というルビを振る表記、「^{レトリック}哲学」は、今後この学の将来について議論するための大きな契機となるだろう。

他にも、ロイド・ビツァーの提起した“rhetorical situation”にもまた、本書は、「レトリック空間」と訳を与えている。これに関しても、今後、CAJ で議論していかなくてはなるまい。バーバラ・ビーセッカーが、このことばが文脈であるとかオーディエンスとの関係をも含み得るものであることを示唆しているが、どのように配置するかによって、訳語が変化する可能性もある。ビツァーに応答したヴァッツのように、これを単に解釈されるだけの客体のように扱うのであれば、訳語としては「(現象としての) シチュエーション」でもいいかもし

れないし、ビツァーのように、発話を促す意味の危機や臨界点としての意味を与えるなら、「磁場」ということになるかもしれない。ビーセッカーによる理論化を経た後であれば、ジャック・デリダに倣い、「原-エックリチュール」でもいいのかもしれないし、またはそれを応用して「原-哲学 (レトリック) 的言説」となるのかもしれない。「レトリック空間」でも汎用性が高いであろうが、その汎用性の高さ故に、元義を失う可能性もある。いずれにしても、本書は、いくつかの重要な概念の日本語への訳出を果敢に取り組んだとも言えるだろう。また、本書による、レトリック・コミュニケーション学の原理主義的アプローチに基づいた、テキスト批評は完成度の高いものである。また、この原理主義を貫く批評は、多くの読者にとり、学の自律性を提示するために、魅惑にあふれている。まず、ここで過剰な表現にみえる「原理主義」という表現であるが、これは、本書が、イソクラテスに倣い、テキストの外部にある、プラトンの「正しさ」「美しさ」「よきこと」などの基準に依拠することなく、政治的状況や文脈において言説化され得る材料 (マテリアル) のみを基にして批評を遂行している点を指している。言説化することの可能性や不可能性を発話・提示するために、その可能性にまさに根差して (錨をおろして) 批評をする、という首尾一貫したポジション取りをしている。例えば、「ヘレネ」は、メルヴィルのバトルビーのごとく、主体形成を暴力的に促す欲望の対象なのであるが、第4章によれば、それは言説化可能な名前なのである。この意味で、結局、名前を含むことば・言説だけが、主体形成の材料であり条件なのである。ということになれば、主体の言説化の可能性を言説の可能性のみに限定させる意味において (つまり決して外部の基準によってではなく)、本書の方法論を「原理主義」と表現してみてもよいのではないかと思った。一方、多くのレトリック・コミュニケーション研究が、批評において外部の規範に依拠しようとしていることを考えれば、レトリック・コミュニケーション研究がますます辺境の立場に置かれるのかもしれないと危惧も覚えてしまう。この学が対象とするものを、狭めるのか、それとも「なんでもレトリック」ということばに代表されるような視点を残しておくのか (これがアリストテレス主義なのだろう)。コミュニケーションを批評するための方法論を、コミュニケーション以外のものから持ち出す場合、学のアイデンティティを揺るがすことにもなりかねない。この意味で、原理主義でいくのか、広く考えていくべきなのか、この学の存在理由に関わるアジェンダを考えざるを得ない。難解な本ではあるが、多くのレトリック・コミュニケーション研究者に共有されるべき重要な論点を提示している研究であることは間違いがない。

藤巻光浩 (静岡県立大学教員)

東豊 [著] 『リフレーミングの秘訣：東ゼミで学ぶ家族面接のエッセンス』 日本評論社 (2013年)

本書のテーマはリフレーミングである。リフレーミングについて著者は「リフレーミングとは、現象・事象に対する見方や理解の仕方に関する既存のフレーム（枠組み）を変化させることである。人のもっているフレームが変わることで、その感情や言動にも連鎖的に変化が生じる。それは家族や職場の人間関係にも影響するので、結果的にその人のおかれた環境も多かれ少なかれ変化する。」(P3)と述べている。また「個人個人の心の中の思いや、それに応じて言葉として出てくるのが個人的なフレームであり、自己規定であり他者規定となる。これを緩めること、あるいは変化させることをリフレーミングという。」(P95)とも定義している。さらにリフレーミングを知識として知るだけに留まらず、上手に使いこなせるようになるように導くのがこの本の役割としている。

まず、本書の全体を見渡したいと思う。第1部では、システムズアプローチと呼ばれる著者の臨床の基となっている心理療法について説明している。このシステムズアプローチの考え方がリフレーミングを理解するためのベースになっている。また著者が提唱するP循環療法という「リフレーミングを上手に行うためにも、必ず身につけておきたい方法」(P36)について説明している。以下に簡単に説明をすると、P循環療法では、人の心の中には「愛」「思いやり」「感謝」のようなP(ポジティブ)要素と「怒り」「不安」「恐怖」のようなN(ネガティブ)要素があると仮定する。N要素が心の中の大きな割合を占める状態が続くと、現実生活でも「病気」「問題」といったN要素が増え、心と現実の間に悪循環が起きる。これをN循環と呼ぶ。そしてP循環はその逆の現象で、P要素の好循環が起こっている状態である。「心理療法の究極の目的は「心がN状態」のクライアントの心の中や日常にP循環を形成することであり、「問題解決」や「症状の除去」はその一部でしかない」(P41)と述べられているように、著者は本書の中でP循環を作るためにいかにカウンセラーがリフレーミングを効果的に使っていくかを豊富な事例を基に論じている。P循環を作る方法も具体的に紹介されており、なるほどと感心させられることが多くあった。中にはこんな次元の考え方がありえるのかと驚きをもって読むところもあったが、そのあたりの詳細は本書に譲りたいと思う。P循環療法について更に学びたい方は同著者の『セラピスト誕生(2010)』も合わせて読むとよいだろう。

第2部では、著者の心理療法の初回面接の内容を通して、リフレーミングの実際を学べるように4つの事例が書かれている。また各事例の後には、著者からの解説と、「東ゼミで学ぶ家族面接のエッセンス」というサブタイトルの示す如く、臨床心理学を学ぶ著者のゼミ生とのディスカッションが続くことで、より具体的にリフレーミングのコツを学ぶことができる。特にゼミ形式のディス

カッションでは、まるで読者が著者のゼミに参加しているような臨場感の中で、セラピーの流れからリフレーミングの勘所を学ぶことができる。著者の軽妙な語りとゼミ生の合いの手からは、小難しさや上から押し付けるような雰囲気は全くなく、ゼミ生を育てることへの真摯な姿勢とユーモアが程よく織り交ぜられており、著者の教育者としての熱意が伝わってくる。

評者が本書から学んだことは、クライアントが持ってくる課題を見るときに、フレームという考え方で理解をすることが、どの心理療法を使うカウンセラーにとっても必須であることである。さらに言うなら、フレームという捉え方は、臨床家に限らず、一般の多くの人にとっても役立つことが多いという思いを持った。「○○の原因はxxである」これは単なるひとつのフレームに過ぎない。そのフレームに入れることでセラピストが解決策を見つけていくことができるかどうかが大切なのである。「システムズアプローチが私たちに教えてくれる宝物は、要は一つひとつの内容(コンテンツ)ではなく、相互作用が変わることが大切だということである。(P216)」と著者が述べているように、起こっている問題に対して、何が原因であるという唯一の正解はない。例えば「妻に問題がある」ように見えても、それを「自分に問題がある」とリフレーミングし、自分が変わることによって家族システムつまり家族の相互作用を変化させることができるのであれば、より問題の解決につながるフレームを選ぶことが大切なのだ。この時に、本当に自分に問題があるかはあまり重要ではなく、「要は、そのようなフレームを採用することが自分の家族を変えるために一番役に立つ方法だから、とりあえずそのように考えてみるということ」(P217)が肝要なのである。

評者が心理療法のオリエンテーションの一つとしている認知療法では、「問題の原因は認知の歪みである」というフレームを採用している。そのフレームを採用することで、うつ病や不安障害などの回復や予防につながるという解決像のイメージが持てるクライアントには有効な治療法である。しかしそのフレームが合わないクライアントには、役立たないどころか害にもなりうる。このような理解の元に、一つの治療法もあくまでフレームの一つとして捉えることが必要だと本書から学ばせてもらった。

「すべての思いはフレームであり、人はそれを自由に選択できる。だからこそ、自分にとってできるだけ役に立つフレームを採用しよう」(P98)とあるように、システムズアプローチは徹底的な実践主義なのである。そして心理療法とは、自分のフレームによって自分を縛ってしまっている不自由な状態のクライアントのフレームを緩めて自由になってもらう作業と言える。セラピスト自身についても、「セラピスト自身が自由人であることが望まれる」(P98)とあるように、自身をリフレーミングしていくことを勧めている。例えばセラピストが「子どもの育て方が問題の原因である」というフレーム

のみしか持っていない場合、そのフレームのみにとらわれて「お子さんの問題は親の育て方がいけなかったのです」などと言ってしまい、単に親を傷つけかねない。このような不自由なセラピストにはなってはいけないう、自戒もこめて読ませてもらった。

また本書には、家族療法家である著者の持っている家族についての有用なフレームが随所に散りばめられている。例えば「家族を健康にする一番のコツは、『家族はいつも成長しつつある』とセラピストが信じていることだ。目につくところがたとえどのような悲惨な状況にあっても、内部では成長のマグマがうごめいていると考えるのがよい。」(P164)とある。まずはこのようなポジティブ・リフレーミングをカウンセラーが自分で行い、それをクライアントとなる家族と共有していくことができれば、不健康な家族というものは単なる幻想としていなくなるのである。

評者は、本書を既に3回以上は読んでいたが、今回書評を書くにあたって何度か読み直した。その度に新たなフレームに気づくことができ、噛めば噛むほどに味が出るスルメのような一冊だと感じた。臨床心理の専門家に向けて書かれた本書であるが、専門家だけでなく、一般の方にも分かりやすく、読み終わった頃には、自身のコミュニケーションの捉え方にもリフレーミングが起こっていることを期待できるかもしれない。

南 和行(あいクリニック神田 臨床心理士)

Kuwahara, Y. (2014) *The Korean Wave: Korean popular culture in global context*. New York, NY: Palgrave-Macmillan.

I need to begin this review with a confession. I may be the worst person to discuss the topic of Korean Wave. I never watched popular Korean TV shows such as Winter Sonata (冬のソナタ) and never been a fan of K-Pop girl groups such as Girls' Generation (少女時代). Watching television was simply not my modus operandi. The Korean news media were eager to report on the Korean Wave of pop culture sweeping across Asia, yet the skeptical side of me downplayed it as a grossly exaggerated claim.

It was not until I visited Japan that I observed the amplitude of the Korean Wave. In 2007, I had a privilege to volunteer for the Otaru Snow Light Path Festival (小樽雪あかりの路). Amidst of ice and snow, the television in the break room, as well as a cup of hot chocolate, became a companion of mine. What I discovered from our new companionship was that it was practically impossible to zap through the channels without encountering Korean soap operas. I also found it especially amusing to watch the Jewel in the Palace (宮廷女官チャングムの誓い), all dubbed in Japanese.

Now that the Korean Wave has become a worldwide phenomenon, my initial skepticism has long been invalidated. I was not even particularly surprised when I saw a pair of

American teenagers dancing Psy's Gangnam Style on the streets of Cincinnati, where I currently reside. I am, however, surprised to find that there is a dearth of scholarly book examining the growing popularity of Korean popular culture around the world.

"The Korean Wave: Korean popular culture in global context" by Dr. Yasue Kuwahara (Professor at Northern Kentucky University) is one of the few volumes that consider the reasons for and the implications of the success of Korean cultural products in the global context. The book also examines the role of popular culture as a means of national as well as international economic policies.

The book is divided into three parts, each subdivided into several chapters authored by scholars in various fields. Part I reveals the governmental role in the production of Korean popular culture. Part II discusses the issue of "glocalization" of culture, including reception, adaptation, and effects of Korean popular culture in other countries. Part III describes the fan base and the implications of the popularity of Korean popular culture, especially in the Japanese context.

Overall, the book effectively presents the discourse on this postcolonial global culture flow of the Korean Wave. It was also well reviewed in the Financial Times and the Los Angeles Times. Like any kinds of scholarly works, however, this book is best read with a healthy dose of salt. For instance, the claim that the Korean Wave is a largely government construct needs further support. While various government initiatives stimulated some areas of the entertainment industry, the overall effectiveness is still questionable. Also, the regulatory initiatives and "protectionist" measures stifle competition and creativity.

In addition, the book focuses on K-drama and K-pop, missing other forms of popular culture, including video games, Manhwa (comics and print cartoons), animation, advertisement, and performance, that may hold significant economic and cultural implications. For example, in 2012, the revenue from the Korean video game industry was ten times greater than that from K-drama. Similarly, the revenue from Korean Manhwa was twice of K-pop's. Hopefully, those issues will be addressed in Dr. Kuwahara's forthcoming project, "East Asian Popular Culture Series," which tackles a wider array of topics in a broader region.

*Lee, Austin Ph.D. (Assistant Professor
Department of Communication |
Northern Kentucky University)*